

「我身にたどる姫君」注解(一)

武原弘
宮田尚
守屋吾

たまたま、中古・中世の文学を専攻する右の三人が合同で一古典作品を読解しあおうとの意向が芽生えたのが去る四月。不遜にも、いまだ研究も深みに達していない作品を対象とすることに意見が一致し、あれこれ作品選択に愚考を弄した結果、ともかく決定したのが「我身にたどる姫君」であった。爾来、月三回の定期的な読みを継続しつつあるが、読解の困難さはある程度予想し得たこととはいいながら、浅学であるに加えて、手がかりとなる注釈書とて皆無のため、遅々として進捗せず、未解な部分を残しながらともかくも先に読み進まねばならぬ場合も屢々であるが、これまで読み來ったささやかな足跡を紙面に掲載することにした。大方のご教示、ご批判をお願いする次第である。

この物語の成立期は、風葉集に物語中の歌が七首採られているところから、最下限は風葉集成立の文永八年におくことができ、上限は、物語の構成、文章上に源氏物語は勿論のこと、狭衣物語の影響も大きく、狭衣物語成立後ということになる。
(古典文庫「我身にたどる姫君」解説、金子武雄先生) 凡そ、鎌倉初期より中葉にかけて成立した作品といひ得る。

筋の展開は非常に複雑であり、時の皇后と閔白との道ならぬ恋の申し子として出生した姫君が、奇しき運命に翻弄されつつ、春宮妃、中宮、皇太后、女院として後に高令の生涯を閉じるといふ大筋に、これをとりまく影しい人物を配置し一見派生的な事件と思われるところをも、精細に物語っている。派生的な事件、人物を多く配置はしているが、大筋を鮮明にクローズアップする目的で書かれてはおらず、いわば平列的に配置されている観がある。姫君を主人公とした筋の発展的展開は、ほぼ巻三までであって、その後の巻には一貫して主人公なる人物を判定することは困難であり、多勢の人物を配置し、人生の宿命的諸相を物語らんとしたところは、王朝から中世へと変遷し來った時代を強く反映しているようである。

現存する伝本は宮内庁書陵部蔵本、九条家旧蔵本、前田家蔵本の三部、すべてが八巻構成で、多少の欠字、欠文や誤字と見

做し得る個所も多いといひながら、物語の本筋には影響もなく、ほぼ完全に近い形で伝えられているという（前記解説）。活字本としては、金子武雄先生がご所蔵の九条家旧蔵本を底本とし、宮内庁書陵部本を対校なされた古典文庫本が唯一のものである。ここでの本文は金子先生ご翻刻になる古典文庫本に拠り、対校に示された宮内庁書陵部本の方が適正と思われる部分については、その旨を語釈の項で指摘することにした。

〔本文〕

春夏秋冬のゆきかはるにつけて、なぐさむかたとは、つれづれとうちながめつゝ、空ゆく月をしたふとしもあらねど、にしの山のは・みやこのかたには、かよはずしもあらぬ心のみちさへ、とちつる心ちして、日比ふりやまぬ雪のあやにくさには、ましてきしかた・行ききかきくらし、物がなしき夕の空、ふみわけたるあとなき庭を、はしぢかうながめおはするさまかたち、げにかうさびしきみやまの雪にとちられ給べくもみえず、あたらしうめでたきを、かつみてもあかず、あらし風もおそろしうのみおもひいたづき給あまうへの御をきての、あはれにたのもしきにも、いづれをなにとわかむにしも、それにふかさのよるべきならねど、猶いかなりしそのゆゑとも、さだかにはるげやらぬいぶせさぞ、わがなみくならぬきはまで、たれかは、をのがじうちたのみ、おぼつかなき所なきには、めづらしかるまじきことなれど、我身にはじめてうらやまれ給ふ。

いかにしてありしゆくゑをさぞとだに我身にたどるちぎりなりけん

ものをとかくおもひむすばれ給はんに、つゆばかりもあかず、めづらかにきよらなる御さまにて、心ひとつにおもひみだれ給も、げにあはれ也。

〔語釈〕

○なぐさむかたとは―心慰さむ方法にもと。「かた」は、手段・方法。○つれづれとうちながめつゝ―所在なく、物思いに耽けりながらながめて。○にしの山のはみ・やこのかた―「にしの山の端」と「みやこのかた」が並列しておかれたのは、後文に「かくいふは、をとの山のみもとなり」とあり、音羽の山麓から西方は京の方角にあたる。○かよはずしもあらぬ心のみちさへとちつる心ちして―心が通わないでもない道でさえも閉じてしまった心地がして。「このころの道」は、心の通う道。○

あやにくさに―生憎さに。折悪しさに。○きしかた・行くききかきくらし―過去、未来も闇と化し。「かきくらし」は、「かよはずしもあらぬ心の道さへ」と「きしかた行くきき」の両方にかかる。○げにかうさびしきみやまの雪にとぢられ給べくもみえず―実際、このような深山の雪の中に閉じ込められておられるお方とは思えない。○あたらしうめでたきを―もつたいないほど美しいのに。「を」は逆態接続とみる。○かつみてもあかず―ちよつと見ても見飽きず。この方の美しさを、ちよつと見ただけでもいつまでも見たいの意。○あらし風もおそろしうのみおもひいたづき給あまうへ―荒い風が吹いても恐しいと思つほど心を配つて、この方を大切にお世話なさっている尼上。○御おきての―お指図が。○それにふかさのよるべきならねど―親に対して情愛の深さが通う筈もないのだが。○猶いかなりしそのゆくゑとも―それでもなお自分はそのような素姓なのであるうかと。○さだかにはるけやらぬいぶせさぞ―己が素姓がはつきりとわからず、心が晴れ晴れとしないうつとうしさは。下文「めづらしかるまじきことなれど」にかかる○わがなみなみならぬきはまで―自分と同等でない低い身分の者まで。○たれかは―「めづらしかるまじきことなれど」にかかる。○をのがじしうちたのみ、おぼつかなき所なきには―おたがいに信頼しあい、気がかりなところもない者にとつて。○めづらしかるまじきことなれど―あずらしいなことであるが。上文「たれかは」のかかりと見做して反語と解する。なお、このあたり構文、文意に疑義が多く、より考えるべきである。○我身にはじめてうらやまれ給ふ―このような己が出自、素姓になんの心配もない身分の低い者たちをこの方ははじめてお羨まれになる。○「いかにしての」の歌―「いかにして」は、手段・方法を求める意で、なんとかして、どうにかして。「ありしゆくゑ」は、我身の出自、素姓。「たどる」は、思い悩む、考えまどう。「ちぎり」は、前世からの因縁、宿縁。歌意は、自分の生立ち、素姓をなんとかはつきりと知りたいものだ。なに故、我身の素姓を己が心一つにあれこれ思い悩むような宿縁に生まれついたのである。○ものをとかくおもひむすぼ、れ給はん―あれこれ思いに沈んでいらつするような折でも。○めづらかにきよらなる御さまにて―格別に美麗なご様子で。

〔通釈〕

春夏秋冬と季節が移りゆくにつけても、心を慰める方法にもと、所在なく思いにふけりながら眺めて、西へ西へと渡りゆく月を特に慕うというわけではないが、西の山の端、さらには京の方に心が通わないでもない、その心の道さえ閉じてしまった心地がして、数日来降り続く雪の折悪しきには、一層過去、未来も闇と化し、物悲しい夕方の空や、人の踏みわけた跡もない

雪の庭を、端近かにしみじみと眺めておいでになる容貌は、実にこのようなきびしい深山の雪に閉じ込められておられるお方も思われず、もったいないほどにお美しいのに、ちょっと見ても見飽きず、荒い風にもおそろしく思うほど大切にお世話なさっている尼上のお指図が心にしみて頼もしいにつけても、なにをどうと判断するにしても、特に情愛の深さが通う筈はないのだが、それでもなお、どのような出自、素姓であるともはつきりと判断できないうつつうしさは、自分と同等でない低い身分の者で、たがいに信頼しあい、己が素姓になんの気がかりもない者には、めづらしいことではあるが、このようなにも懸念のない身分の低い者までこの方ははじめてお羨まれになる。

—いかにしてありしゆくゑをさぞとだに我身にたどるちざりなりけん。—自分の生い立ち、素姓をなんとかわが心一つにあれこれ思い、はつな宿縁に生まれついたのである。

あれこれ思い悩んでふさぎこんでいらつしやる時でも、見る人の目には少しも飽きませず、格別に美しい様子で心一つに思い乱れていらつしやられるのも、実にお氣の毒である。

〔余説〕

冒頭は、とにかく息の長い書き出しである。いわゆる狭衣物語型の書き出しで、物語の常套ともいうべき時、場所、人物についての具体的な説明は後に廻し、主人公らしき人物を情緒的に点描することから始められている。高貴な姫君らしき人物を設定し、深山の雪に埋もれた日々の生活の晴るけやらぬつれづれもさることながら、己が素姓を定かに知ることでもできず鬱々として明け暮れるということで、物語の発端としては、極めて暗示的である。深山の雪の中、己が素姓を知り得ぬ高貴な姫君等は、物語の設定として決してめづらしいものではないが、情緒的な発端であるだけに、当時の読者を物語の世界に誘い込むに十分なものがあつたのであろう。

〔本文〕

いはけなき程は、そこはかとなき花もみぢにつけても、ふかくおもひたどることなくこそはおひいで給めりしかど、やう／＼ものゝ心つき給まゝに、またなくたのみ給へる人も、猶まことに思そめしすちにはあらぬにやと、そのことゝわくまじきながしのそうづのせ経のつゝで、かくれのふるごたちの物がたりにも、よを

のがれ、かゝる御すまひにても、はたちにはおほくすぎにけりと、きゝしられ給。わが御よはひかぞふるに、十といひし事も、わづかによとせ・いつとせのまじかさなれば、さばいかなりし我身の行衛ぞ、それや誰など、おもひみだるれど、とひあわすべき人もなし。むつまじうたのみ給ひし弁の君は、よすがとたのむめりし、ちくせんになりてくだりしを、いみじうなげしきかど、そもおほやけ事かぎりありていそぎたちしみちなれば、人をとゞむべきにもあらず、又たけういひのがれても、さまゝ見すてがたきすゑゝにかゝづらひて、つゐにさそはれにしかば、いつしかとまちわたり給とし月のはてゝは、なにがしのかむわざにつきて、かの國のびにけり。かみはうれしきことにいへど、いきの松原心づくしなる御なからひなり。

〔語釈〕

○そこはかとなき花もみちにつけても―なんということもない春の花、秋の紅葉を見るにつけても。○ふかくおもひたどることなくてこそはおひいで給めりしかど―己が素姓、出自を深く思いめぐらすということもなくて、成長なされたようであるが。○またなくなったのみ給へる人―この上もなく信頼していらつしやる人、すなわち尼上。前段に「あらし風もおそろしうのみおもひいたづき給あまうへの御をきてのあはれにたのもしきにも云々」とある。○猶まことに思をめしすぢにはあらぬにや―それでもなお実際には幼少の頃思ひ初めた血縁にある人ではないのであろうかと。「まことに」は「あらぬにや」にかかると。○そのことゝわくまじきなにがしのそうづのせ経のついで―内容がなんであるかもはつきり判断できない某僧都の説教のついでの話の折。○かくれのふるごたちの物がたりに―物影に在る年増の女房たちの世間話にも。○よをのがれ―俗世間を離れ。主語は尼上。○かゝる御すまひにても―このように人里離れた山深いところに住まっても。○はたちにはおほくすぎにけり―二十を多く過ぎたほどの若きである。一般的には出家遁世し、山深く世俗を離脱する人ならば、二十代というがとき若きではなく、比較的高令者の場合が多いことが前提となつてゐる。余説参照。○きゝしられ給―主語は姫君。○十といひしことも、わづかによとせ・いつとせのまじかさなれば―十才といつたこともわずかに四、五年前のことで、十四、五才であることをいう。○さばいかなりし我身の行衛ぞ―それならば自分は何のどのような素姓なのであろうか。こゝは前文「わがよはひをかぞふるに、十といひし事も、わづかによとせいつとせのまじかさなれば」が原因となつており、尼上の年令「はたちにはおほくすぎにけり」との関連性から、姫君はおぼろげに尼上が母親ではないかと思つていた、そのことが明確に否定されたこと

を言うのである。○それやたれなど―実際には両親は誰であろうかなどと。○弁の君―姫君の侍女。○よすがとたのむめりし―夫として頼りにしていた人。○ちくせんになりてくだりしを―筑前の守となつて任国に下つたのを。○いみじうなげきしかど―主語は弁の君。○そもおほやけ事がざりありていそぎたちしみちなれば―それにつけても公務には限度があることとて、急いで出立した旅であつたから。○人―弁の君の夫。○又たけういひのがれても―弁の君自身、筑前に下ることを強く言ひのがれたところで。○さま／＼見すてがたきすゑ／＼にかゝつらひて―あれこれと見捨てることもできない幼い子供たちにかかづらつて。○つゝるにさはれにしかば―遂に誘われて筑前に下つてしまつたので。○いつしかとまちわたり給とし月のはて／＼は―弁の君が筑前より早く上京せんものかと待ち続けたそのあげくのはては。主語は姫君。○なにがしのかむわぎにつきて―なんとかいう神事に関係して。○かの国のびにけり―筑前の国司としての任期が延長されることになつてしまつた。○いきの松原心づくしなる御なからひなり―「いきの松原」は筑前国早良郡にある松原。伊勢大輔集に「そちのゆかりにて、筑紫へくだりけるむすめに」の詞書で「千とせまでいきの松原いく君を心づくしにこひやわたらむ―返し―いきの松原いきても君にあふことの久しくならむ程をこそ思へ」とあり、これら二歌に依拠していることは当然であるが、ここでは「いきの松原」は「心づくし」を導き出すべく、序詞的に働いている。意は、たがいに気のもめる姫君と弁の君とのめづらしい悶柄であることだ。

〔通 釈〕

幼少の時分は、どうということもない春の花、秋の紅葉を見るにつけても、深く我が身の素姓を思いたどることもなくて、成長なきつたようであるが、次第に物心がおつきになるに従つて、この上もなく信頼なきつて居る尼上も、実際には幼少の頃思ひはじめた血縁にある方ではないのであろうかと、内容がどのようなことかもはっきりしない某僧都の説教の折のついでの話のなかや、物影にいる老年の女房たちの世間話のうちにも、この尼上は世俗を離れ、このような山深い住まいに生活していても、いまだ二十を多くすぎたほどの若い方であると、お聞き知られになる。姫君は自分の年令を数えると十才といったのもわずかに四、五年前のことであつたのだが、それならば、我が身はどのような素姓なのであろうか、本当のところ親は誰であらうなどと、あれこれ思い乱れはするものの、問い合はすことのできる人もいない。むつまじい仲で信頼なきつていらつしやつた侍女の弁の君は、夫として頼りに思つていた人が、筑前の守に任じられて、任国に下つたのを、ひどくなげいたのだから、それも公務には限度というものがあつたこととて、急いで筑前に向けて出立した旅であつたから、弁の君としては夫を京に

とどめておくこともならず、一方夫の後を追って筑前に下向することを、強く言いがれたところで、あれこれ見捨てることもできない幼い子供たちにかかずらって、遂には夫からも誘われもして、筑前に下ってしまったので、弁の君が早く上京せんものかと姫君がお待ち続けになっておられた年月のあげくのはては、なんとかいふ神事にことづけて、筑前の守の任期も延長されることになってしまった。夫の方はよろこばしいことのように言うが、弁の君、姫君にとつては決してうれしいことではなく、たがいに気のもめるめずらしい間柄であることだ。

〔余説〕

語釈、通釈においては「よをのがれ、かかる御すまひにても、はたちにはおほくすぎにけり」を尼上の年令と解したが、別に、「尼上が普羽山中の草庵に入ってから二十数年も経ってしまった」とも解し得る。いずれにしても、姫君にとつて尼上が母親でないことは変わらない。

〔本文〕

さてもいはけなかりし程の、夢ばかり思ひわかざりしほかげに、みつげきこえたりし御にはひのかざりなかりしは、をのづからわするゝ世なきおもかげなれば、かゞみのかげにもやうゝおもひあはせらるゝに、いとよもたどりよりぬべけれど、さはそのかたにて、かけてもおもひよるべき身のうさかは、なにごとのむくひに、我身ひとつにかゝるちぎりのあるべき、雲のよそ・風のつてにもをのづからきゝつたふれば、さまゝにいつかしき御ありさまどものなみゝにて、まことにおもひよるすぢならば、たれもいかなる御心にてか、あしたゝぬひることはしづみなるべきと、うちかへしおもふも、げに心えられず、物がなしきことぞおほかる。さらば、はなれぬ御ゆかりなどに、あはれともおぼしいでらるべきゆへやありけむ、それや世におはせぬ人ならん、をのづからかたつかたはうちそひ、おもふさまならぬたぐひあれど、かうふたみちに行衛なきやうやはある、などのみ、いたづらなるまゝにおぼしみだるゝに、あいなう物おもはしき心のうちぞ、いとくるしかりける。かたちは日にそへてひかりまさるを、ほどなきしばのとほそも心ぐるしうのみはぐゝみかね給へるも、又にごりなき御おこなひはおほくまぎれぬべし。うちかすめの給事もなきを、われさかしうとひいでんに、つき

なきすぢなれば、たぐおほどかにもてなして、ゑ物がたりなどになぐさみ給へど、それにつけては、ためしなき身のみあはれにおぼさる。

〔語釈〕

○さてもいはけなかりし程の―それにしても幼少であった頃の。○夢ばかり思ひわかざりしほかげに―少しのものの分別もつかなかつた灯の光に。○みつけきこえたりし御にほひのかざりなりしは―見つけ申し上げたお気配のすばらしくこの上もなかつたのは。○おのづからわするゝ世なきおもかげなれば―自然と忘れることも決してない面影であれば。○かゞみのかげにもやう／＼おもひあはせらるるに―鏡に映る自分の顔かたちの中にも、その方との似通うところのあるのを思い合わせられて。○いとようもたどりよりぬべけれど―大層よくその方の面影を探りあてることができる筈なのだ。○さはそのかたにて―それはそれとして。○かけてもおもひよるべき身のうさかは―その方が誰であるのか容易に思いあたるような、なまやさしい我が身のつらさであろうか、決してそんなになまやさしいものではない。○我身ひとつにかゝるちぎりのあるべき―我が身一つにこのような宿縁があるのだろうか。「かかると」は、素姓が定かでないこと。○雲のよそ―雲のかなた。遙かに隔たつてゐる様にいう。○風のつて―風のたより。○をのづからきゝつたふれば―両親についての風聞を自然と耳にすると。○さまざまにいつかしき御ありきまどもなみ／＼にて―その両親についての風聞もいろいろに立派なご様子のもので、しかも風聞としてはごくありふれたもので。○まことにおもひよるすぢならば―本当に思いあたる血縁であるならば。○たれもいかなる御心にてか―誰もどのようなお心でか。「か」は、反語、下文「しづみなるべき」と照応する。○あしたゝぬひるのことはしづみなるべきと―素姓も知らずもの思わしい状態に自分をいつまでも放置しておこうか、そんな筈はない。日本紀、饗宴歌、大江朝綱の歌「かぞいろは哀と見すや蛭の子は三年になりぬ足たたずして」(両親は自分を可愛そうだと思ってくれないであろうか。不遇な状態で三年も経ってしまったのに。)、これに依拠した源氏、明石の巻「渡つ海にしづみうらぶれ蛭の子の足立たざりし年は経にける」(この私は須磨明石に沈倫して三年も経ってしまった。)等に拠っている。○うちかへしおもふも―繰り返し思うものの。○げに心えられず―実際には黙然とせず。○はなれぬ御ゆかりなどに―きつてもきれない御縁者のなかに。○あはれともおぼしいでらるべきゆへやありけむ―お気の毒だと思ひ出されるようなにかり由があつたのであろうか。○それや世におはせぬ人ならん―その人はもうこの世に生存していないのであろうか。○をのづからかたつかたはうちそひ―

自然と片親ぐらいは添って。○おもふさまならぬたくひあれどー理想的だとは言えない例もあるにはあるが。○かうふたみちに行衛なきやうやはあるー自分のようにこう二親についての素姓もわからないような例があるか。○いたづらなるまゝにおぼしみだるゝにー身をむなしくするほどに思い乱れていらっしやう。○あいなう物おもはしき心のうちぞー心満たないもの思わしげな心中は。○かたちは目にそへてひかりまざるをー顔かたちは日増しに美しくなつて行くが。○ほどなきしぼのとぼそも心ぐるしうのみはぐゝみかね給へるもーさして大きくもない粗末な住家も気の毒なくらいこの姫君を世話しかねているのも。「しぼのとぼそ」は、柴で作った戸。転じて粗末な住家。この粗末な家に住む尼上を象徴的に表現したもの。○又にごりなき御おこなひはおほくまざれぬべしーまた一方では、にごりもない仏への勤行も、姫君にかかずらうて多くとりまざれてしまふようである。○うちかすめの給事もなきをー尼上は両親について口の端にのせることとてなさらぬのに。○われさかしうとひいでんにー自分からこざしく尋ねるのも。○つきなきすぢなればー不相慮なことであるから。○たゞおほくかにもてなしてーただおっとりとかまえて。○それにつけてー絵物語を見るにつけて。絵物語に展開される女主人の身の上などに我が身を比較するのである。○ためしなき身のみあはれにおぼさるー類例もない我が身の上を悲しくお思いになる。

〔通 釈〕

それにしても幼少の頃の夢ほどの分別もつかなくなつた灯影に見つけ申し上げた方のお気配のこの上もなかつたのは、自然と忘れることもできない面影であるから、鏡に映る自分の顔かたちの中にも、次第にそのお方との似通うところのあるのを思い合わせられて、大層よくその面影を探り当てることはできる筈なのだが、それはそれとして、その方が誰であるか容易に思ひあたるような、なまやさしい我が身のつらさであろうか。決してそんなになまやさしいものではない。なんの報いによつて、我が身一つがこのような宿縁に生まれついたのであるか。雲のかなた、風のたよりにも、両親についての風聞を自然と耳にすると、それもいろいろに立派なご様子のもので、しかも風聞としては、極ありふれたもので、本当に思いあたる血筋であるならば、誰もどのようなお心で、素姓も知らずもの思わしい状態に自分をいつまでも放置しておく筈があるうかと、繰り返し思ひはするものの、実際には釈然とせず、もの悲しいことばかりが多い。それならば切つても切れないほど近しい御縁者のなかに、お気の毒だと思ひ出されるようななにか理由があつたのであろうか、ことによつたらその方はもうこの世に亡き人なのかも知れない。普通ならば自然と片親ぐらいはうち添って、理想的とはいへない例もあるが、自分のようにこう二親についての素姓もわからないような例があるであらうかなどと、身をむなしくするほどに思い乱れていらっしやるにつけ

でも、心満たないもの思わしげな心中はひどく苦しげなことである。容貌は日にそえて美しくなつては行くが、小さな粗末な住屋すなわち、尼上はお気の毒なほど姫君をお世話しかねているのも、一方ではにぎりない仏への勤行も多くとりまぎれてしまうようである。尼上は姫君にその素姓を口の端にだにのせることもなさらないのに、自分からこざかしく問い出すのも不相応なことであるから、ただおっとりとした態度で、絵物語などに気持ちを慰めておいてになるのだが、絵物語を見るにつけても、類例もない我が身の上だけを悲しくお思いになつてゐる。

〔余説〕

初段では女主人公のはるけやらぬ我が身の素姓を内面的に思い悩むことに重点を置いた極めて暗示的な叙述がなされ、前段及びこの段においては、次第に具体的なものになり、己が両親が何人たるかを知らんとする叙述に転換している。この段では特に、両親を求める姫君の心境が強く現われてきている。

〔本文〕

ちくせんがむすめ、おとうとなるぞ、かた時さらずそひたてまつれる。あねは少将といひし。そもおなじころしも、藏人よりつかさ給はりしひぜんにかたらひつきにしかば、よきかたのいでたちひきぎして、いとゞいきほひこよなくてくだりにしかば、つかひならし給ふなかにだに、はかしくしうつれん／＼なぐさむばかりうちかたらひ、世中のあるかゝるをわくばかりなるもなし。なにがしの宰相のむすめ、おやなどなくて心ぐりしげなりとさきて、さう／＼しき御なぐさめにもと、むかへよせ給へるも、たゞち／＼は、のなきをのみ恋なきで、いとはれん／＼しからぬさま也。

〔語釈〕

○ちくせんがむすめ、おとうとなるぞ―筑前の守の娘で、妹にあたるのが。「おとうと」は男女にかかわらず年下の者をいう。ここは勿論、妹の意。○かた時さらずそひたてまつれる―姫君に侍女として四六時中つき添い申し上げる。○あねは少将といひし―姉の方は呼び名を少将といった。○そもおなじころしも―それも親の筑前守が任国に下向する頃とちょうど同じ頃。

○藏人よりつかさ給はりしひぜんにかたらひつきにしかば一六位の藏人から五位に叙せられ肥前守に任じられた男と結ばれてしまったので。「かたらひつく」は、結婚する。○よきかたのいでたちひきぐして一少将は好都合なことに任国への旅立ちに一緒に連れて。「よきかた」は、少将からすれば、肥前国は両親の任国である筑前と近い故、好都合な方角である。○いとどいきまひこよなくてくだりにしかば一大層威勢よく任国へ下ってしまったので。○つかひならし給ふなかにだに一侍女として召し使い馴れたなかにさえ。○はかしくしう一下文「わくばかりなるもなし」にかかる。○世中のあるかゝるをわくばかりなるもなし一世の中のあるこれをかんに判断するほどののはかばかしい者とていない。○なにがしの宰相のむすめ一某宰相の娘で。「宰相」は「参議」の唐名。○おやなどなくて心ぐるしげなりときゝて一親も他界してしまつて氣の毒な状態にあるのがあると聞いて。○さうしき御なぐさめにも一姫君のさびしい心のお慰めにしようと。○たゞちゝはゝのなきをのみ恋なきて一たゞもう父母がいらないのを慕い泣いて。主語は宰相のむすめ。○いとはれしくからぬさま也一どうもさつぱりしない有様である。

〔通釈〕

筑前守の娘で、妹にあたる者が、姫君に四六時中うち添つてお世話申し上げている。姉の方は呼名を少将といった。それも筑前守が任国へ下向した頃とちよほど同じ頃のこと、六位の藏人から五位に叙せられ、肥前守に任じられた男と結ばれたので、少将は好都合なことに肥前への旅立ちと一緒に連れだつて、大層威勢よく任国へ下つてしまったので、姫君は召し使い馴れた侍女のなかにさえ、うち沈みがちな心を慰めるほど語り合ひ、世の中のあるこれを定かに判断するほどののはかばかしい者とていなくなつてしまった。某宰相の娘で、親などもすでに他界してしまつて、氣の毒な状態にある者がいると聞いて、姫君のさびしいお心の慰めにもと迎え寄せなかつたところ宰相の君は、ただ父母のいないのを慕い泣いてばかりいて、どうもさつぱりしない有様である。

(昭四十二年十一月)